

# 沖永良部島の屋敷林と海岸植生

宮城邦治

## 1. はじめに

人々の生活を自然災害から守り、平和な暮らしを営むための備えとして防風垣や防風林、防雪林などがある（矢嶋、1967）。南島に住む人々は石垣や屋敷林をしっかりと構え、島をおそう台風や季節風に備えてきた。沖縄諸島や先島諸島などでは防風や防火用に植栽される屋敷林の樹種はフクギと呼ばれる喬木で、赤瓦の建物とともに地域の風土性をよく表わした独得の人文景観をつくってきた（矢嶋、1967., 市川、1978）。

屋敷林とは防風や防火、防雪などの目的で家屋、屋敷などのまわりに植栽された樹木のことである（宮脇、1977）が、屋敷林に使われる樹種は目的や地域環境の違いなど、さまざまな状況によって当然異なると思われる。そのことは、地域の人々と自然との関わり合いを考える上でも興味深いものがある。

筆者は1979年9月17～21日、1980年2月4～8日まで延べ8日間、沖永良部島の和泊町と知名町で屋敷林の構成樹種や利用方法について調査をおこなった。また、沖永良部島の自然環境を把握するために海岸植生についても調査をおこなったので、その概要を報告する。

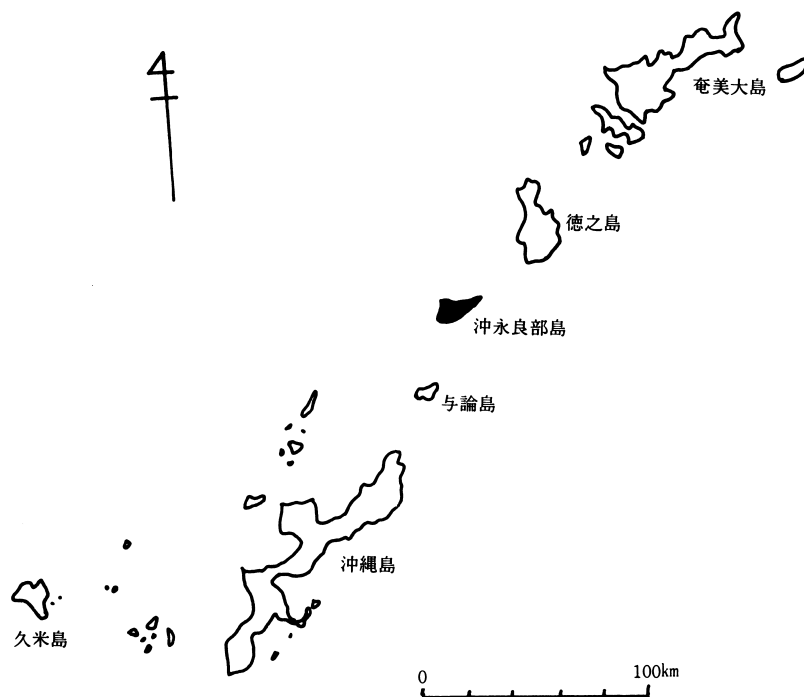


図1 沖永良部島の位置

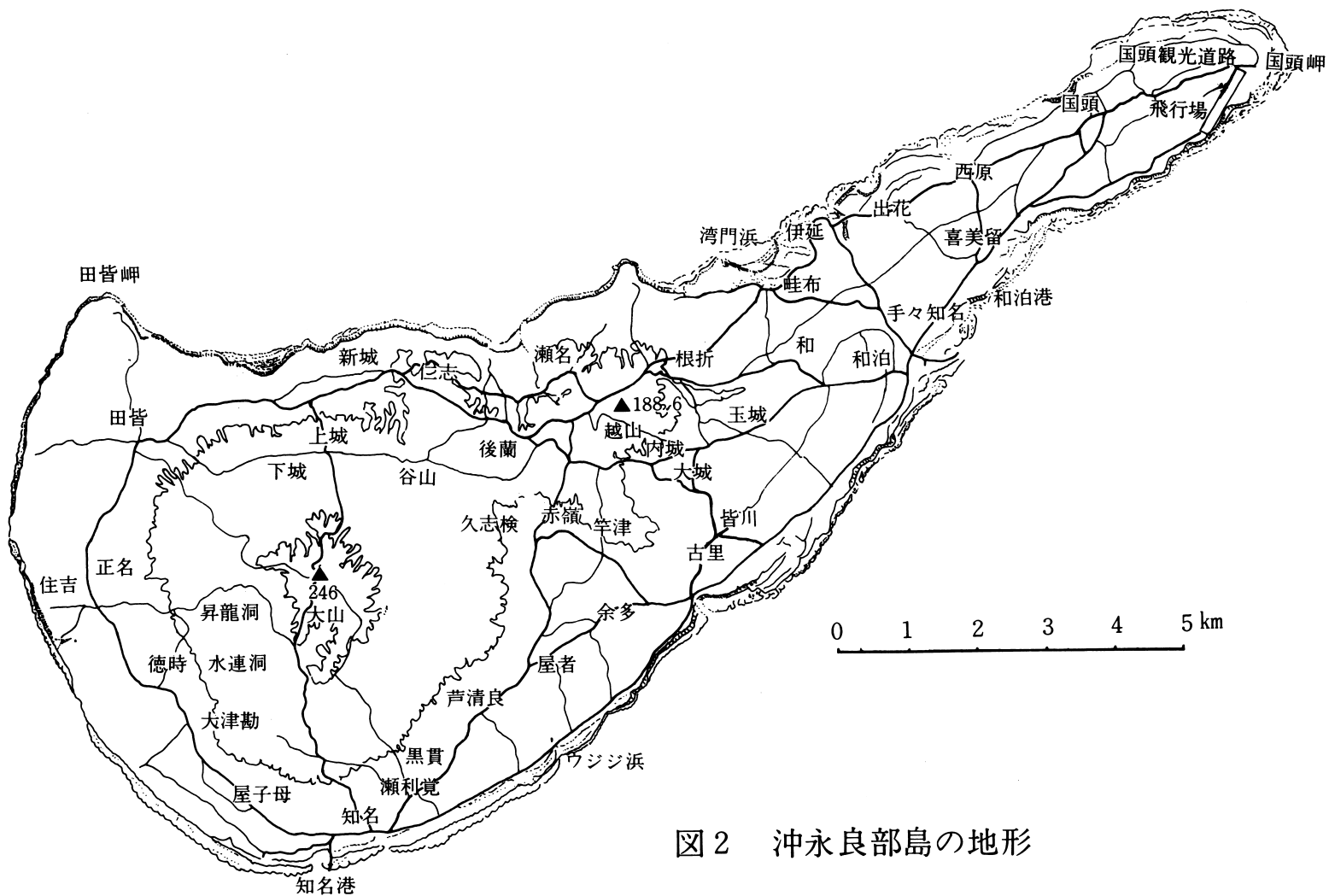


図2 沖永良部島の地形

## 2. 沖永良部島の地理的・地形的概要

沖永良部島は北緯27° 20′ ~27° 23′ 26″、東経128° 35′ ~128° 39′ 25″ の間に位置し、周囲 60.3 km、面積が94.51 km<sup>2</sup>のやや東西に延びた島である。沖縄島那覇市から北東へ約160km、奄美大島名瀬市から南西へ約140kmの距離である（図1）。

島の西方中央部に大山（246m）が、東方に越山（188.6m）があり古生層の地層がみられるが、大部分は隆起珊瑚礁からなる平坦な台地状の地形である（図2）。

気候は四季を通じて温暖で、年平均気温は21.9℃、最高月は7月の27.9℃、最低月は2月の15.2℃で温量指数が205.9、年降水量が2,201mmの亜熱帯性気候である（図3）。風は4～9月は南から、10～3月は北から吹くことが多く、風速は年平均3.8m/sec であるが、台風の襲来時には40m/secに達することがある。1977年9月には瞬間最大風速70mの「沖永良部台風」の襲来により多大な被害をうけている。

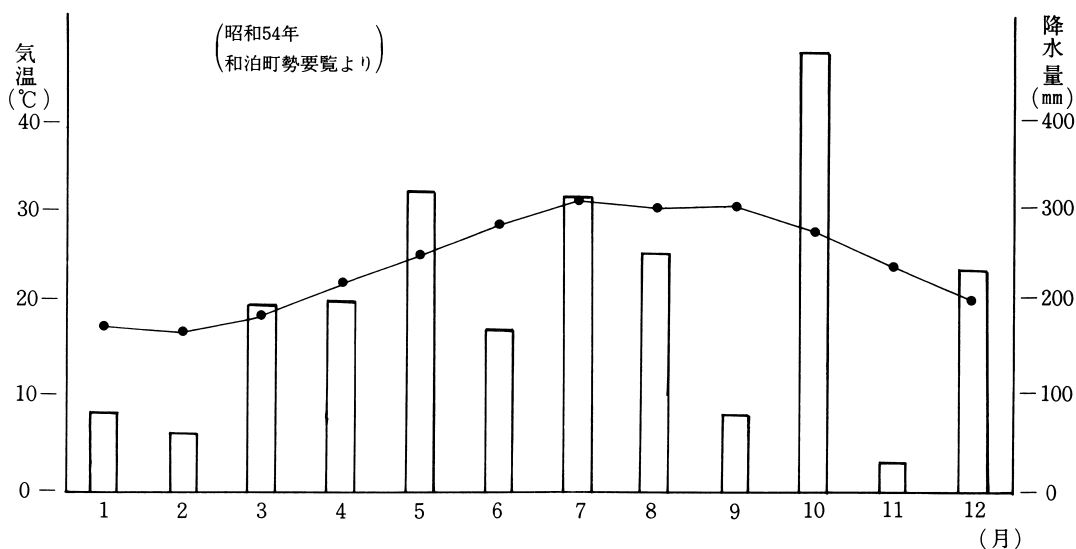


図3 沖永良部島の気温および降水量

## 3. 屋敷林の概要

屋敷林の構成樹種、利用方法などについて和泊町と知名町で調査をおこなった。

### 3-1) 和泊町内城 上原氏宅

屋敷囲いは高さ140cm程の石垣でできており、その内側や石垣の上に屋敷林が植栽されている。樹種はガジュマル・ハマユビワ・ヤブニッケイ・センダン等で、それらの下層にはゲッキツ・クワズイモ・イスノキ・ハゼノキなどがみられる。

屋敷の入口近くにはクロトン、ミカン等で「目隠し」が作られている。また、石垣の外側（道路側）にもクロトン・ゲッキツなどが植えられている。

家人は屋敷林のおかげで「沖永良部台風」の際にも被害がなかったことを誇らしく語っていた（plate 1）。

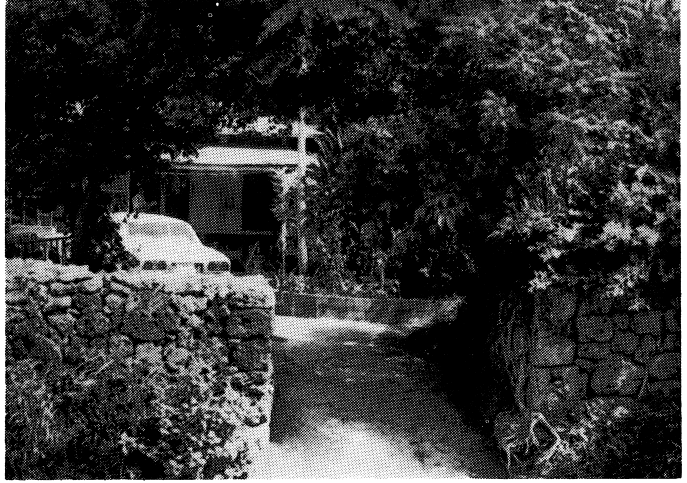


plate 1

3-(2) 知名町新城 英 哲一郎氏宅

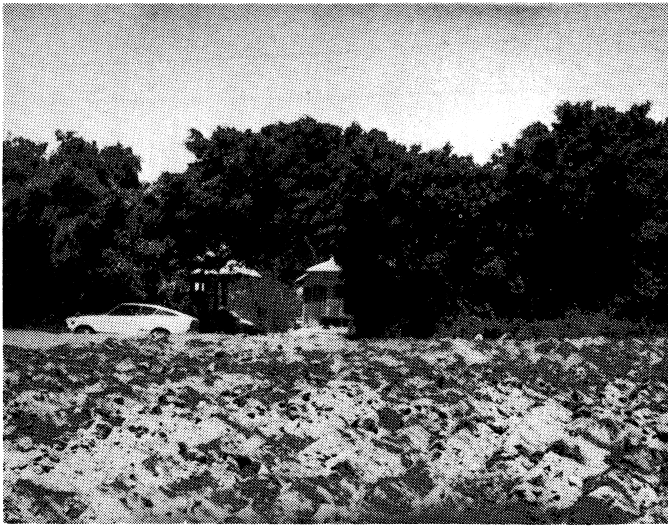


plate 2

ガジュマル・ヤブニッケイ・ハマヌビワなどの喬木が植栽されているが、明治時代に防風を目的に植栽されたものである。また、ガジュマルやハマヌビワなどは青草が減る冬季には、牛の飼料として重宝したとのことである（plate 2）。

隣家は廃屋になっているが、同様にガジュマル・ヤブニッケイ・アコウなどの屋敷林がみられた。入口の方にはハウライチ

ク・トベラ・ゲッキツ・ネズミモチ等が、沖縄諸島や先島諸島などでみられる「ヒンプン」に相当する「障子垣」「目隠し」として植栽されている。

3-(3) 知名町住吉 盛山健次郎氏宅

ガジュマル・フクギ・ハマヌビワ・クスノハカエデ等が植栽されている。「障子垣」はクロトン・ソテツであるが、戦前はタケを植えてあったという。またハウライチクなどで編む場合もあったという。

3-(4) 和泊町畦布 宮田池直氏宅

屋敷林はハマヌビワ・ガジュマル・モクダチバナなどが主体で、「目隠し」にはクロトンが植えこまれていた。

3-(5) 知名町新城 久保先篤氏宅

ガジュマル・ヤブニッケイ・ハマイヌビワ・オオハマボウ・ホウライチク等が植栽されている。昭和6年頃最初にホウライチクを植えたが、それは根付きがよく、成長が早いからということであった。現在では「目隠し」はないが、戦前には石垣・竹・ゲッキツで作ってあったという(図4)。

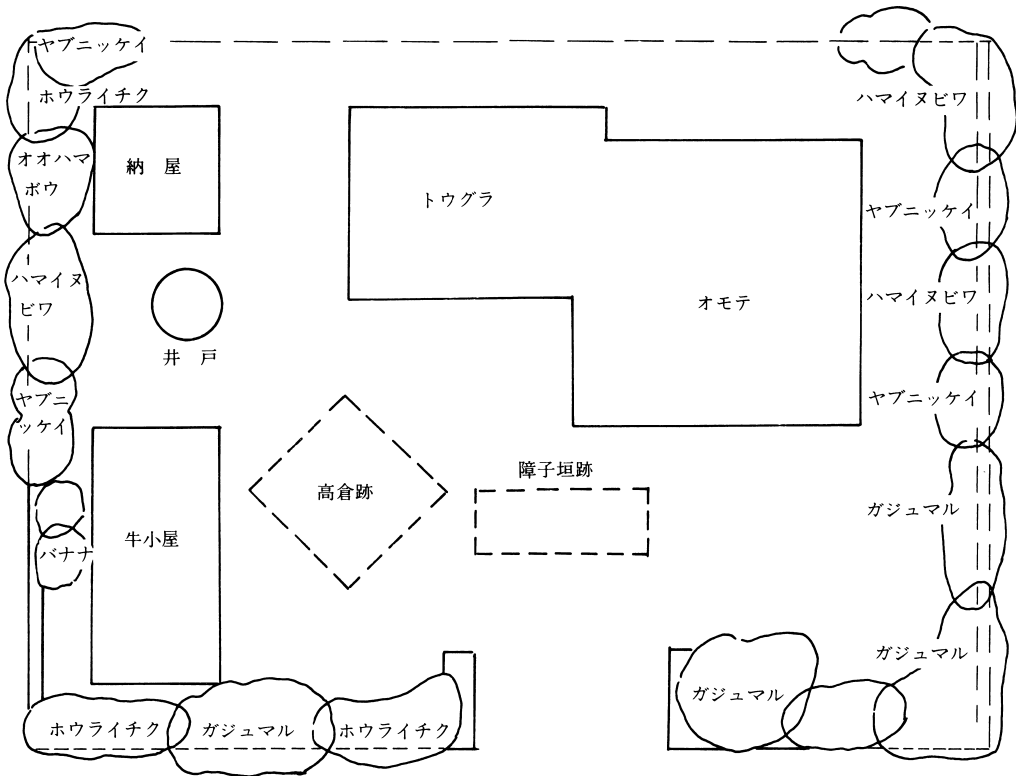


図4 知名町新城 久保先篤氏宅



Plate 3

3-(6) 和泊町畦布

屋敷の入口は石垣で囲まれている。その上にハマイヌビワ・ガジュマル・モクタチバナ・ソテツ・ゲッキツ・クロツグなどがみられた(plate3)。

「目隠し」は屋敷囲いの石垣をL状につなぎ合せて作り、その背方にソテツが植えこまれていた。

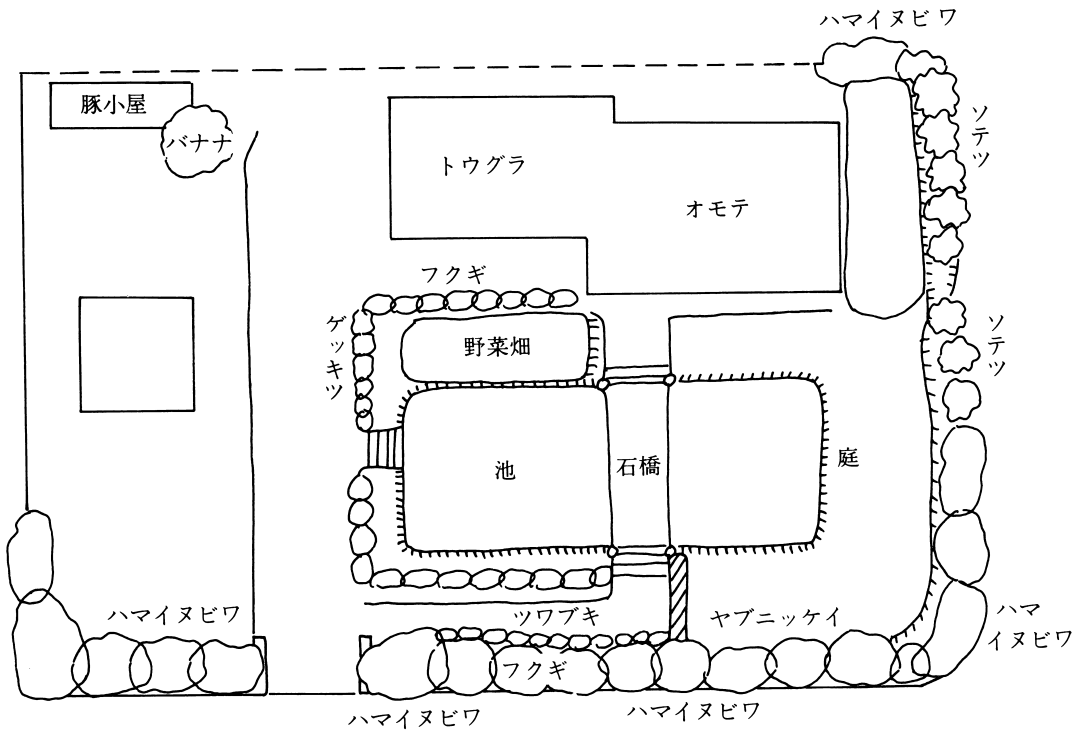


図5 知名町徳時 岩元氏宅

3-(8) 和泊町畦布 山岡茂樹氏宅

ハマイヌビワ・ガジュマル・オオハマボウを主体にした屋敷林である。「目隠し」はないが、相当する場所にはハウオウボクが1本植えられ、花壇がつけられていた。

3-(7) 知名町徳時 岩元氏宅

この家は昔からの「大家」であったという。屋敷の前方は高さ160cm程の石垣で囲まれており、その中にフクギ・ヤブニッケイ・ガジュマル・ハマイヌビワ等が植栽されている。「目隠し」はゲッキツ・フクギを使い見事に作られていた (plate 4, 図5)。



plate 4

3-(9) 和泊町久志堅 富江誠一氏宅



石垣で屋敷のまわりを囲み、その内側にフクギ・クスノハカエデ・ハマイヌビワ・ガジュマル・イヌマキなどが植えられている。裏側（北側）にはリョクチク・フクギ等があり、「目隠し」にはミカン・クロトンが使われている（plate 5）。

plate 5

3-(10) 和泊町和泊

ガジュマル・フクギ・ハマイヌビワを主体にした屋敷林で、モクタチバナ・オオバギなどもわずかに見られる。「目隠し」にはクロトンが利用されていた。

3-(11) 知名町屋者

高さ110cm程の石垣で屋敷を囲み、その上にはハマイヌビワ・ガジュマル・オオハマボウ・アカギなどが屋敷林として植栽されている。石垣の外側（道路側）にもクロトンが植え込まれている。「目隠し」は石垣で作られているが、クロトン・ミカンなどで石垣を隠してあった（plate 6）。

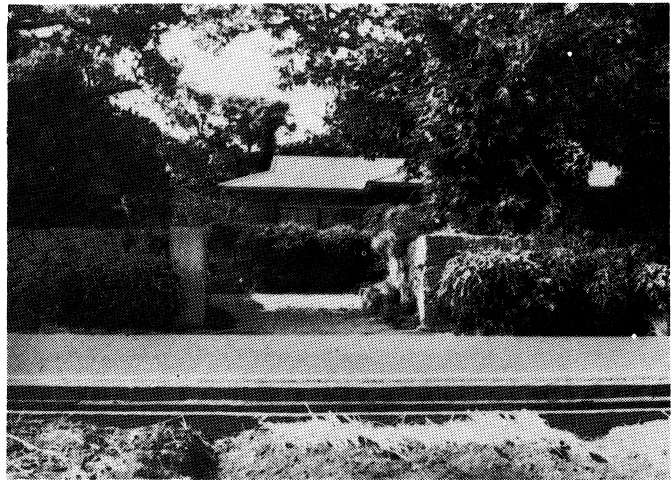


plate 6

3-(12) 和泊町手々知名 町田氏宅

和泊町文化財に指定されている屋敷で、胸高直径約100cmのフクギの大木の屋敷林がみられる。石垣とフクギの屋敷林は壮観であり、沖縄や先島諸島のフクギ屋敷林と比較しても遜色がない。「目隠し」は石垣で作られているが、ゲッキツ・ブソウゲがまわりに植栽されている（図6、plate 7）。

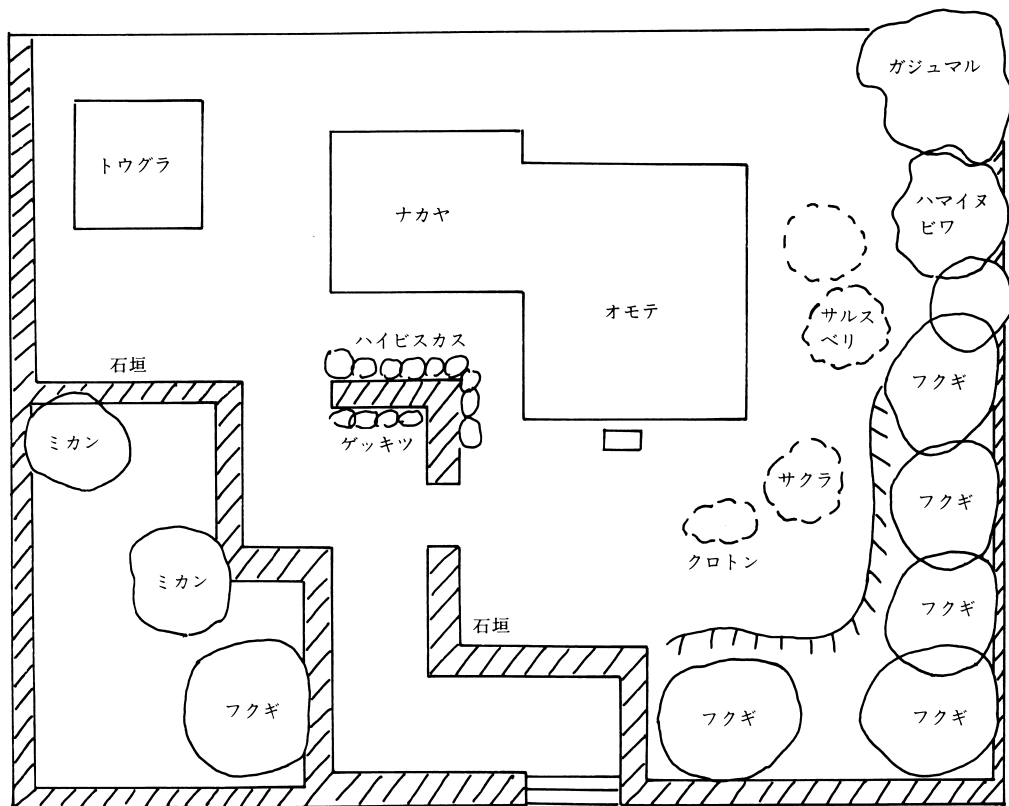


図6 和泊町手々知名 町田氏宅



plate 7

このように沖永良部島で見られる屋敷林は高木層としてはハマイヌビワ・ガジュマル・ヤブニッケイ・オオハマボウ・ホウライチク・フクギなどが主体である (plate 8)。



低木層はサンゴジュ・モクタチバナ・ゲッキツ・トベラ・ネズミモチ・アコウ・オオバギ・クスノハカエデ・ハゼノキ・ソテツなどがみられる。高木層のガジュマル・ハマイヌビワ・フクギなどは防風・防火用として意識的に植栽されたものであるが、低木層は沖永良部島の自然植生の構成種であり、一部の樹種を除いて、とくに人為的に植えられたものではない。



plate 8

また、ハマイヌビワ・ガジュマルなどの屋敷林が多いのは、戦前の農家では牛の飼育が盛んで、冬季の飼料として利用したためである（plate 9）。



plate 9

沖縄諸島などで今日みられる屋敷林はフクギを主体とするものであるが、沖永良部島の場合は農家の経営形態との関係で、屋敷林に使われる樹種が意識的に選択されていると考えられる。

また、屋敷の空間利用は沖縄諸島などと基本的には類似するがやや変形的である。すなわち、沖縄などでは旧来の屋敷には

「ヒンプン」と呼ばれるものがあり、石垣で作られる場合が多い。沖永良部島では「目隠し」「口隠し」あるいは「障子垣」と呼ばれ、クロトン・ゲッキツ・フクギ・タケなどでつくられ、トウグラと呼ばれる台所が隠れるようになっている（plate 10）。

沖永良部島の屋敷林は一言すれば「実利」的なものであり、生活の中に植物を取り込むという事が沖縄などよりも多くおこなわれており、農村地などでは昔ながらの人文景観をつくっている。

また、低島に属する沖永良部島では（木崎編、1980）、台風や季節風から農作物を守るために、畑地にも防風林が作られている。すなわちソテツを利用した防風林で、畑地の畦にはソテツが植栽され、防風と畑地の境界確認に役立っている（plate 11）。

ソテツは戦前には薪木・食糧・ミソの原料にも使われたことがあり「実利」的な防風林である。

このようにソテツを利用した

畑地の防風林は沖縄諸島などではみられないもので、沖永良部島独特の景観となっている。



plate 10

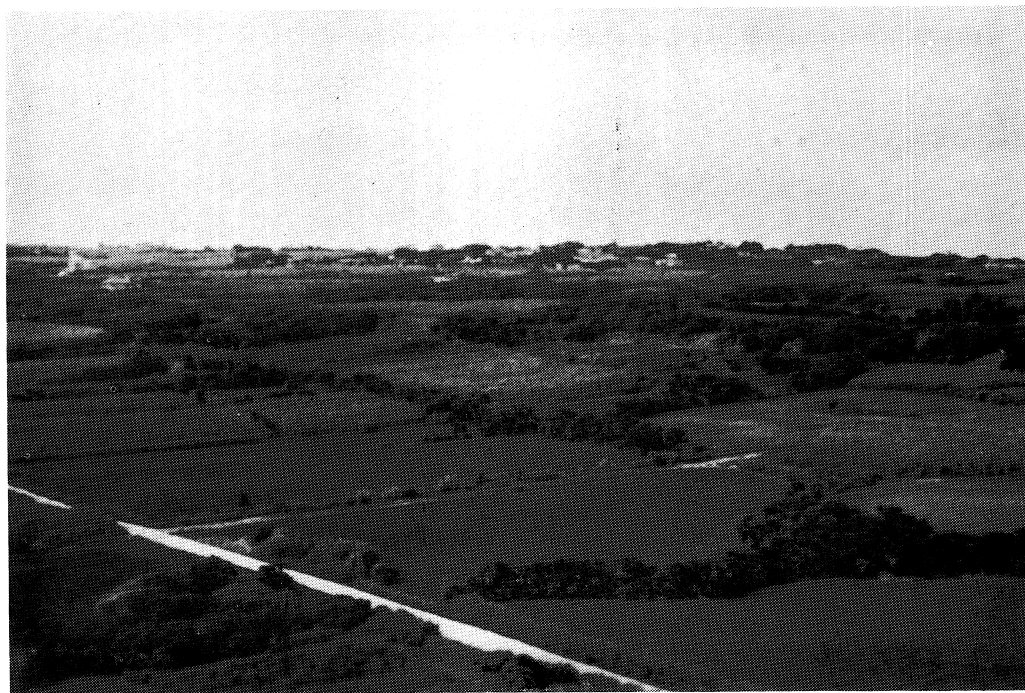


plate 11

#### 4. 海岸植生の概要

沖永良部島の海岸地形は変化に乏しく、一部に海浜がみられるだけで、ほとんどは隆起珊瑚礁の岩礁台地になっている。島の北東部の喜美留、国頭、西原などの海岸は典型的な隆起珊瑚礁地形で、とりわけフーチャと呼ばれる海食洞は見事な景観を呈している。

南島の島々ではこのような隆起珊瑚礁の荒原には独自の海岸植生がみられ、沖永良部島も例外ではない。沖永良部島の海岸植生については若干の報告がある（田川、1967., 日野、1967）が、筆者は沖永良部島の海岸植生の概要を把握するために和泊町の国頭観光道路周辺と知名町芦清良のウジジ浜で調査をおこなった。

##### 4-1) 調査結果および考察

沖永良部島の海岸植生は基本的には沖縄諸島や先島諸島に類似する（新納、1976., 沖縄県、1978）が、国頭の海岸植生はイソマツ・イワダイゲキ・テンノウメなどの出現頻度が低い。またクサトベラ・モンパノキなども矮小化が目立ち、一見して冬季の季節風の影響をうけていることがわかる。しかし、飛沫帯から内陸方向へイソマツ帯～イワダイゲキ・コウライシバ帯～テンノウメ帯～クサトベラ・モンパノキ帯へと続く zonation がはっきりと認知できる。このような zonation の後方にはアダン群落がよく発達する（図7）。

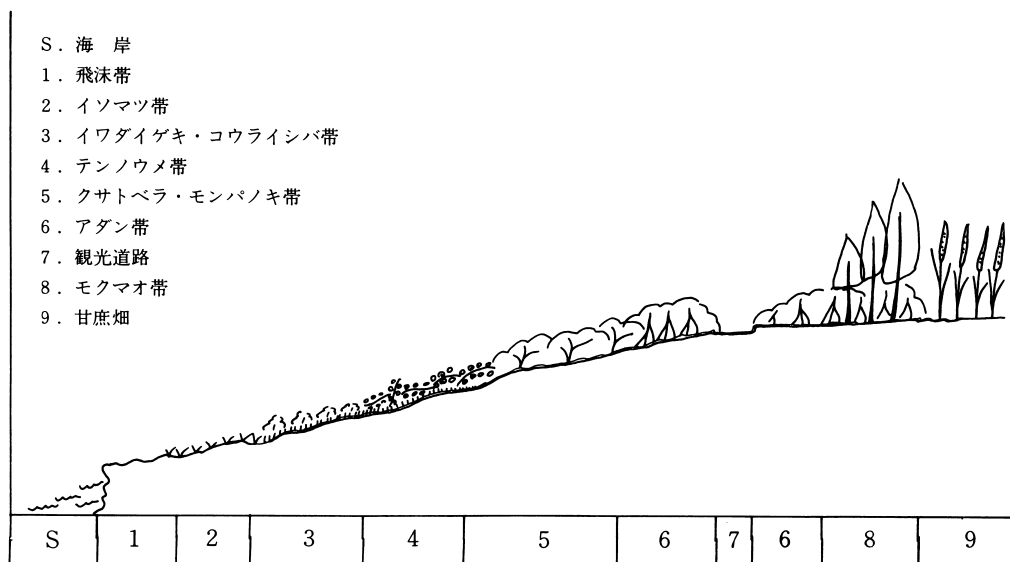


図7 国頭観光道路の海岸植生のZonation

アダン群落は防潮・防風林として重要な役割を担っているが、近年、海岸に平行してアダン群落の中を観光道路が建設された結果、道路周辺のアダン群落の枯死が目立ち、パッチ状の空地が広がっている (plate 12)。

このような空地にはエノコログサ・シマアザミ・グンバイヒルガオ・キダチハマグルマ・ツキイゲ・スナヅル・ハマボッスなどがみられた。



plate 12



このようなアダン群落のもつ防潮・防風林としての機能を見捨てて作られた観光道路は、アダン群落だけでなく、その後背地に植栽されたモクマオウ林も枯死させるなどの悪影響がでている (plate 13)。

そのために、海岸近くまでせままっている甘蔗畑は潮害により、立枯れ、矮小化が著しく、大きな経済的損失をこうむっている。

plate 13

知名町芦清良のウジジ浜の岩礁は凹凸が激しく、その凹凸地形の表面を植物が被覆し、zonation は国頭海岸同様にはっきりしている。すなわち、飛沫帯からイソフサギ・イソマツ帯～イワダイゲキ・コウライシバ帯～テンノウメ帯～クサトベラ・モンパノキ帯～アダン・ソテツ帯～クロヨナ・オオハマボウ帯へと続く zonation である。

岩礁の凹地ではイソマツ・イワダイゲキの出現頻度が高いが、飛沫帯に近い凹地では矮小化したクサトベラがみられ、潮害によると思われる枯死が目立っていた。テンノウメは岩礁の凸地を被覆し、よく発達していた。

岩礁地の後方は砂地になっておりグンバイヒルガオ・シマアザミ・ハマボッス・クサトベラ・モンパノキなどがみられた。

アダン群落はよく発達しており、その中にソテツが点在している。アダン群落の後方には、クロヨナ・オオハマボウ群落が見られ、防潮・防風効果を増加させている（図8）。

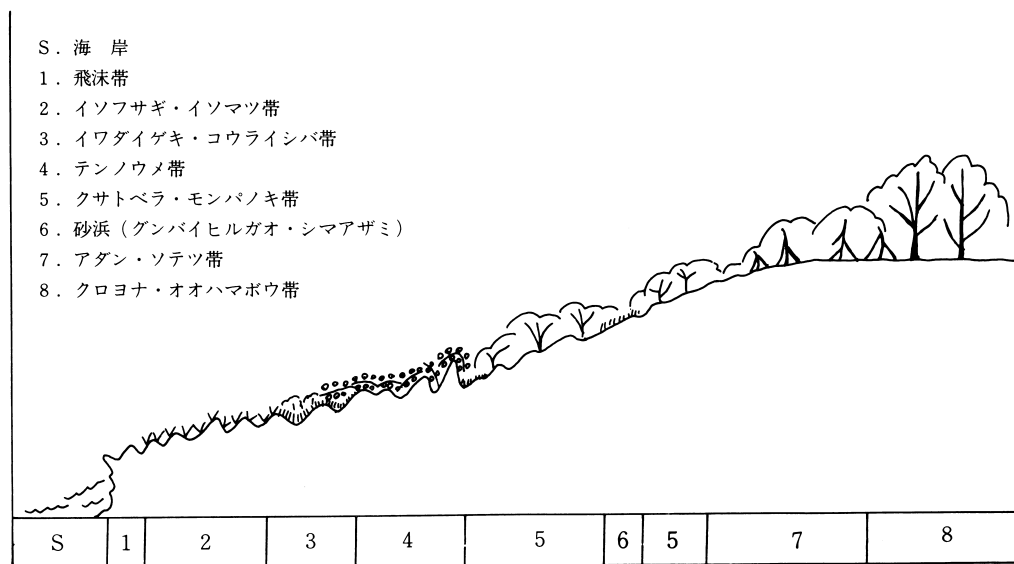


図8 芦清良ウジジ浜の海岸植生のZonation

国頭・芦清良など沖永良部島の海岸植生は基本的には zonation がみられるが、国頭のように季節風や潮害を受け易い海岸ではアダン群落前方の植生は全体的に貧弱である。

しかし、沖永良部島のように隆起珊瑚礁の岩礁の地形が発達し、海浜の少ないところでは海岸植生、特にアダン群落、クロヨナ・オオハマボウ群落などは防潮・防風林として重要な役割を担っている。このような事から海岸地形の利用・開発は植物群落のもつ機能を十分に留意した上でおこなわれるべきであろう。

参 考 文 献

日野 巖. 1967. 沖永良部島採集維管束植物目録、宇部短期大学琉球学術調査報告 第2集：55～67

市川健夫. 1978. 風土の中の衣食住、東京書籍.

木崎甲子郎編. 1980. 琉球の自然史、築地書館.

宮脇 昭. 1977. 日本の植生、学習研究社.

新納義馬. 1976. 沖縄の植物自然、沖縄県のすぐれた自然：1～56、沖縄県環境保健部

沖縄県. 1978. 特定植物群落調査報告書.

田川日出夫. 1967. 南西諸島の植生図 1. 沖永良部島と与論島. 鹿児島大学理科報告、16：121～127

矢嶋仁吉. 1967. 日本の集落、古今書院.